

コロナ禍の中、現地集合型学会を開催して

第58回日本人工臓器学会大会大会長、高知大学医学部外科学講座外科1

花崎 和弘

Kazuhiro HANAZAKI



1. はじめに

2020年11月12日(木)から14日(土)の3日間、四国では初めてとなる第58回日本人工臓器学会大会を開催した。大会テーマは「人工臓器研究の進歩と臨床展開—日本から世界へ発信する人工臓器学—」とした。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の第3波到来かのタイミングにもかかわらず、現地集合型学会を実施した。大変なご不便・ご負担の中、予想をはるかに上回る396演題のご発表があり、743名のご参加をいただいた。大会テーマに沿った的確な発表が行われただけでなく、参加者全員がCOVID-19感染防止対策にも真摯に取り組んだ。その結果、本大会は成功裡に終了した。大会主催者として望外の喜びである。本稿ではコロナ禍の中で行われた現地集合型大会を総括する。

2. COVID-19感染拡大防止対策

COVID-19感染拡大のため、特に2020年3月以降はASAIO(米国人工臓器学会)、ESAO(欧州人工臓器学会)も含めた国際学会だけでなく、国内の全国学会もほとんどが中止・延期に追い込まれ、延期となった学会の多くがweb開催またはハイブリッド開催を強いられた。このような厳しい状況の中、なぜ本大会は現地集合型開催が実現できたのか？ミラクルが起きたのか？その理由について述べる。

一つ目は開催地の高知市も含めて、高知県の新規感染者数が2020年10月30日から11月20日までゼロであり、大会期間前・中・後の感染状況が比較的落ち着いていた点で

ある。大会開催期間に重なるこの時期に新規感染者数が長期間にわたりゼロだったのは、全国で高知県のみであった。まさに「幸運」といえる。

二つ目は大会期間中、私どもが作成したオリジナルの感染対策マニュアルに沿った感染対策を参加者全員で共有し、実施できたことである。その要点を以下に示す。

マスク着用の義務化

会場内にマスクを用意し、参加者全員がマスクを着用した。大会の演者の講演および座長・聴衆者間との質疑応答も含めて、全員がマスクを着用したまま行うことを徹底した。

検温

大会期間中、会場の出入り口にて毎日参加者全員の検温を行った。その結果、体温の異常を示す参加者はいなかった。

換気

会場の出入り口、および会場内の全ての部屋の換気を頻回に行った。大会期間中は天候にも恵まれたため、高知市の平均気温が上昇し、寒くならなかったことも幸いし、十分な換気が可能であった。

三密対策

いわゆる「密閉・密集・密接」の三密回避を徹底した。2020年リニューアルしたばかりの、高知市で一番大きな会場(高知県立県民文化ホール)をメイン会場として使用した。その結果、最も人が集まるセッションにおいても想定参加者の約3倍のスペースを確保することができ、三密回避にきわめて有効であった。加えて演者・座長・受付の前には大型の亚克力板を設置し、飛沫感染予防も心がけた。

手指消毒

会場の出入り口、および会場内の全ての部屋の出入り口にて、参加者全員の手指消毒を徹底した。また、参加者が使用したマイクや机・椅子周囲など、参加者が濃厚接触したと思われる箇所も含めた消毒を頻回に実施した。

■ 著者連絡先

高知大学医学部外科学講座外科1
(〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮)
E-mail. hanazaki@kochi-u.ac.jp



図1 大会初日に行われた「第1回人工臓臓療法ハンズオンセミナー」集合写真
皆様お疲れ様でした

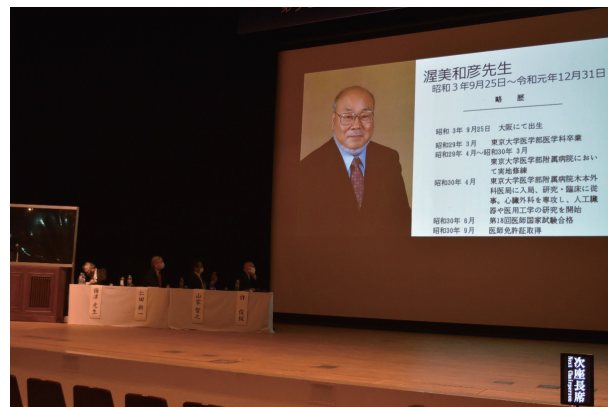


図2 大会2日目に行われた「大会長特別企画：渥美和彦先生を偲んで…思い出を語る」
渥美和彦先生のご冥福を心からお祈り申し上げます

筆記用具の持参

大会期間中に使用する筆記用具は全て参加者個人に持参していただき、共有できる筆記用具は会場内に置かなかった。

以上の感染防止対策を参加者全員が共有し、真摯に取り組んだ結果、大会終了後1か月以上経過した現在（2020年12月）、参加者の中から新規感染者は1人も出ていない。

3. 本大会の目玉企画

本大会が初めてとなるものも含めた目玉企画として、以下の4つを紹介したい。

①時宜を得た企画として、大会3日目（14：15～15：15）に「特別企画2：新型コロナウイルス感染症に対するExtra Corporeal Membrane Oxygenation (ECMO)の果たす役割」を実施した。国内のECMO治療に精通した座長2名およびエキスパート4名の講演を介して、COVID-19感染の現状と課題について白熱した議論が展開された。

②大会初日（9：00～16：20）に「第1回人工臓臓療法ハンズオンセミナー」を実施した（図1）。7名のインストラクターから、12名（全国から選抜された医師・看護師・臨床工学技士の3名で構成された4施設）の受講者に対し、終日セミナーが施行され、参加者全員がセミナー習得度テストに合格した。セミナー終了後は日本人工臓器学会からの公式受講認定書が授与された。初めての開催であったため、セミナー受講料・テキストブック代・お昼の特製弁当が全て無料という特典付きであった。

③大会2日目（16：10～18：10）に「大会長特別企画：渥美和彦先生を偲んで…思い出を語る」が行われた（図2）。2019年12月31日にご逝去された本学会名誉会長の渥美和彦先生は、北野高等学校時代の同級生で、

漫画の神様と言われる手塚治虫先生の代表作品『鉄腕アトム』のお茶の水博士のモデルとしても有名である。コロナ禍の中、母校の東京大学でも偲ぶ会は実施されておらず、本大会が初めての開催であった。大変思い出深いエピソード溢れる偲ぶ会となり、天国の渥美先生もきっと喜んでくださっているはずだ。

④大会3日目（15：40～16：30）に「市民公開講座」を行い、およそ50名の市民が参加（無料）した。高知大学医学部循環制御学講座の佐藤隆幸教授による特別講演「テクノロジーが医療を変える：高知から世界へ発信する光線医療」が行われた。佐藤先生が開発され、臨床において汎用されている蛍光ガイド手術手技のHyperEye Medical System (HEMS)（ミズホ株式会社）を中心に、様々な独創的研究の成果が紹介された。市民公開講座については「興味深い講演だった」と後日高知新聞でも報道された。

4. おわりに

本大会において、私は大会長だけでなく、理事長職も兼務した中で現地集合型学会を開催した。皆様から「よくぞやった」「高知に行けて本当によかった」と心温まる励ましのお言葉を頂戴した。「天の時、地の利、人の和（天地人）」が見事に結集し、成功裡に大会を終了することができた。一生の思い出となる記念すべき大会となった。参加者および関係者の皆様に心から御礼申し上げますと共に、コロナ禍の中、挫けずに生き抜きましょう！そして、2021年11月25日～27日の第59回大会（千葉大学大学院医学研究院心臓血管外科教授 松宮護郎大会長）で再会しましょう！

本稿の著者には規定されたCOIはない。